【研究ノート】

軽度知的・発達障害を持つ路上生活者の生活史

――覚え書き――

深　谷　美　枝

本論は知的・発達障害者のホームレス化について考えるための覚え書きの第二弾である。

前論に記した通り，端緒は単身，駅で生活する路上生活者，Ａさんとの衝撃的な出会いである。Ａさんは聴覚過敏からか耳を叩き続け，話しかけても視線を交わすことができず一見して発達障害が疑われる人であった。軽度の知的障害の重複も感じられた。

凍死の危険性が懸念されたため支援団体にもつないだが，障害のため信頼関係の形成が難しく，かつ言語によるコミュニケーションも困難だった。
支援団体の方が手紙を書いても，平仮名も読めない。視覚化し写真等を用いて説明しても，結局理解が難しかったようだった。もとより，生活保護制度の理解など覚束ない。突破口の見つからぬまま，厳冬期を如何に乗り越えるかが課題として残された。支援団体の方と筆者，そして友人が相互に連絡を取り合いつつ，毎日のように見守りと差し入れをし，何とか越冬した。

以来，見守り支援は継続し，２年経過して少しずつ緩いネットワークが出来始め，関係者から色々な情報を得ることが出来るようになった。同時にほんのわずかだが生活史や生活状況の情報も入手できた。

以下は住民，関係諸機関（福祉事務所その他），支援団体等から少しずつ情報収集し再構成したAさんの生活史の再構成である。見守り支援の一環として共有していただいたものであり，個人情報を省き特定されないことを条件に論文化の許可をいただいている。

1　Aさんの生活史

（1）　再構成された生活史

Aさんは某市某区生まれ，50代である。家族は当時4人家族で兄弟もいる。広い家屋敷を持つ相当の資産家である。兄弟も何らかの障害が疑われて単身無職である。

普通高校卒業後，手帳はどこかで取得しているようで，途中作業所に通ったこともあるようだ。その後再び地元の工場に勤務し，20年間実直に働く。6年程前に上司からパワハラに遭い，退職する。本人はこのことが痛手であり後悔を語ることがある。

退職後家族からの虐待が始まり，父が死亡してから特に兄弟からの虐待が強度になり，身体的暴力の他，食事を与えられずに犬のように屋外で生活させられたり，物置に監禁されたりする。本人によれば「家族に無断で仕事を辞めたことを怒って」であるという。大声で本人を怒鳴ったり暴力を振るったりすることがあり，地域住民が当時亡父の介護問題で関わっていた地域包括支援センターに通報していたが具体的には介入しなかったらしい。理由は詳細不明。この時の体験も本人は詳細に語ることがある。本人にとっては恐ろしい年月だったようだ。

その後，本人は隙を見て逃げ出し，地元の駅周辺で生活している。目立つところに起居していて地域住民からたびたび通報が入るため，福祉事務所は緩やかに本人の見守りを継続している。数回栄養障害のために病院搬送されていて，その都度生活保護の受給を勧め，ホームレス支援の枠組みに乗せようとするが本人は頑なに拒否。「母親に叱られるからダメ」という。生活保護という概念理解は全く出来ないが人の世話になるなといわれているらしい。一度簡易宿泊所に泊まったが1泊だけで自ら地元に戻ってしまった。

駅周辺で生活しているのは，地元で知り合いの顔が見られることと，母親が

いつか迎えに来てくれると固く信じているからという。そのため地元を離れる気持ちは全くない。

家族は一貫して関わりを拒否。「本人が勝手に出ていったのだから謝るまで家には入れない」といい，病院搬送時も「勝手なことをしてくれるな」と怒鳴る始末。本人の障害に対する理解も全くと言っていいほどない。

本人は生活能力が高く，土地勘があり適応して暮らしてはいる。食事はコンビニの賞味期限切れを貰い，図書館や地区センター等公共の場で日中は過ごす。常に排除されないように周囲に気を遣って生活していて，清潔にも留意して適宜身体清拭等しているようだ。

尚，本人には本人名義の相当額の預貯金があり，しかも本人はその預貯金の存在を知らないようだ。家族による，年金の搾取を含む経済的虐待も疑われる。

（2） 生活史から考えたこと

関係した諸機関はどうやってAさんからこれだけの聞き取りを出来たのか，まずは驚いた。生活能力に比して対人コミュニケーション能力が乏しく殆ど2年間，会話らしい会話が成立しなかったからである。自閉症の障害に加えて虐待の後遺症による場面緘黙もあると考えられるようになった。

普通高校を出ているのは特別支援(養護)学校義務化前のことだからと考えられるが，殆ど「お客さん」状態だったことだろう。高卒後は一般就労したものの難しく，手帳を取得して作業所に通った時期もあったのだろうが，作業能力が高いため障害者雇用で工場に就職し，安定的に20年間も勤務を継続することが出来た。本人のパワーを物語るエピソードである。

パワハラで仕事を辞めたのは人間関係のもつれとして語られるが，時代の変化による仕事内容に，本人がついて行けなかったこともあるのではないか，と予想する。辞めたことは彼にとって困難な人生の開始であり，家族による虐待が本格化する引き金となった。

虐待が顕在化しにくかったのは広大な家屋敷を持ち，近隣の目に比較的触れにくい他，高齢化の進んだコミュニティであるという土地柄から，虐待に対する意識が低かったせいもあるのではないかと推測される。尚，高齢の母親も何らかの障害(精神障害または発達障害？)を持つ兄から，高齢者虐待を受けている可能性も示唆される。

父親の死亡前後，地域包括支援センターが母親の支援を目的に一時期家族に関わっていて，本人への虐待の通報も受けていたようなのだが，積極的に介入しなかった。その理由は定かではない。高齢福祉の立場からは手に余ると考えたことは予想に難くない。また障害者虐待防止法成立以前であり，意識が十分でなかったことも考えうる。確かに関係機関も指摘する通り，たとえ介入して本人を保護しても社会資源が乏しくて支援の方向性が見えなくて，どの機関も手を出せないでいるようである。

支援方向としてホームレス支援の枠組みを用いることはことごとく失敗している。本人の唯一の希望は家族との再統合であるからである。今後の方向性としては本人に相当額の資産があることから，ホームレス支援ではなく，成年後見制度を利用し本人の人権を守り財産を保護する方向性が考えられる。

弁護士と筆者の面談の限りでは成年後見も後見や補佐の範疇ではなく，補助にしか該当しないであろうということで，本人の同意が必要，ということだった。しかし現状では本人は非常にコミュニケーションが困難で，同意を取り付けることは難しい。

一つ可能性があるのは「後見的支援」[(1)]の制度活用により，継続的に相談室に関わりを作ってもらい，高齢関係諸機関と連絡を取り家族状況も把握したうえで，タイミングを見て成年後見の申し立てをしていくことである。しかし，この制度も出来て日が浅く，相談室の支援の守備範囲が未知数であるため，情報収集が必要である。

2　生活史の分析

（1）　家族の抱える課題

妻木等(2010)[(2)]が指摘するように，一般的にホームレス化の原因には「生育家族における重層化した困難」があると言われる。また知的・発達障害者の場合にも中野(2013)[(3)]はホームレス状態にある知的障害者のライフコース研究から，「家族の置かれていた状況」をその一因としている。

Ａさんの場合には上記の研究で指摘されるような，家庭の貧困の問題は存在しないことが大きな特徴である。ただし社会の高齢化を反映して高齢家族による「老障介護」の問題が存在しているのと，何らかの障害を抱えた兄の引きこもりと暴力という問題と，潜在的に予測される高齢者虐待の課題を孕んだ「孤立化し，密室化した家族」という困難な状況が指摘できる。

（2）　適切な療育，教育が受けられていないこと

この要素は森川(2012)，中野(2013)らによって指摘されている。特に中野は学齢期に障害が見逃されていたため，障害に配慮した教育を受けることや，就労支援等のサービスを受けることが出来なかった２事例を挙げているので，Ａさんと共通する要素が強い。

Ａさんの場合，育った時代的な背景が養護学校(現特別支援学校)の義務化以前であり，知的障害・発達障害に対する理解も進んでいなかったため，適切な療育を受けることもなく，また家族の障害受容も極めて不十分なまま，普通学級で高校まで卒業してしまった。どのように教育システムを終了出来たものなのか不明だが，文字も読むことも出来ない。本人の生活能力に比して知的能力が低く，適切な教育が受けられれば生活の困難さはかなり緩和されたものと考えられる。

（3）「暴力の連鎖」とトラウマ

この要素は知的・発達障害者のホームレス化の要因のうち，各ライフステージを通じて最も目立つ特徴的要因一つである。「暴力の連鎖」とは高森(2012)[4]が述べるように「ある当事者の人生の中で児童虐待や学校でのいじめ，職場ハラスメント，DVなどが繰り返し発生し，そこから抜け出せなくなっている状態」と定義しておく。

まず生育家族における兄弟や親からの障害の無理解があり，虐待がある(森川2012，高森，逵[5])。兄弟からは精神的虐待を受けたり，親からは躾と称して虐待が行われたり，家庭の複雑さからのネグレクトやDVの被害を受け易いことがあげられている。

次に教育システムにおけるいじめがある(森川2012，高森，鈴木2012b[6]，逵，荒木[7])。高森はホームレスになった発達障害の当事者の事例を紹介しているが，小学校の普通学級でいじめにあい，中学でも同様の経験が重ねられたことが分かる。

最後に職場におけるハラスメントや排除が上げられる(森川2013，中野，鈴木2012a，逵，荒木)。森川(2013)では声のトーンの調節が出来ず行く職場行く職場でいじめに遭ってきた中度知的障害者が描かれる[8]し，中野の事例の当事者二人はいずれも障害のため上手く仕事をこなせず，てんかんを持っていることが判明して仕事を辞めさせられている。逵の事例では発達障害に由来するコミュニケーションの特徴から，嫌われて排除される様子がうかがわれる[9]。

これらの「暴力の連鎖」はトラウマを作りだし，挫折体験を作り出し，教育システムや職場からのドロップアウトの直接的原因となる他，失踪して住居を失う直接の原因となることもある。また二次障害としての鬱病等を引き起こしてしまうことも多い。

また，単に繰り返されるという意味での「連鎖」ではなく，一つの虐待が他

のいじめに直接に繋がる事例も見受けられる。例としては逵[10]が家庭におけるネグレクト状態が学校でのいじめにつながる事例を挙げている。

Ａさんの場合には教育システムにおけるいじめについては記録がないため存在の有無を確かめる術がない。しかし他の二つについては今回確認することが出来た。職場でのパワーハラスメントがあり，たまりかねて退職したことが引き金となって，家族全員からの身体的虐待，心理的虐待，ネグレクトに発展していった。預貯金を取り上げるなど経済的虐待も見られている。(ただ，20年間の就労中，家族と全く良好な関係を保っていたとは考えにくい。退職を機に激化，顕在化しただけではないかと想像している。)

ただ20年も同一の職場で実直に勤務出来たという事実からすると，Ａさんは小さないじめやハラスメントに対しては相当打たれ強く，多くの軽度知的障害者の就労支援の場面で感じられるような「傷つきやすさ」とは無縁の人だったのではないかと想像されるため，ハラスメント自体が尋常ならぬ強さのものだったのではないかと思われる。

この虐待はもともと発達障害に由来するＡさんの人とのコミュニケーションの困難を，トラウマを及ぼすことで大変強くした。アプローチする支援者たちをなかなか信用しない上，２年関わり続けても現在も距離を保ち，緘黙状態を継続している。

また，職場でのパワーハラスメントが家庭での虐待に直接つながるという，虐待の直接的な連鎖が見られている。

（４） 相談者の欠如

中野(2013)[11]はホームレス状態にある知的障害者のライフコース研究から，「家族の置かれていた状況」「低学歴」「労働形態がもたらした生活」「相談者の不在」「時代の影響」「見えにくい『軽度』知的障害」の要因を挙げていて,「相談者の不在」は一因になっている。

Ａさんの場合も職場でのパワーハラスメントの折も，家族による虐待の折も相談者がない。家族や親族，友人，教師，近隣住民などのインフォーマルサポートもなく，相談機関等の支援もない。

就労後の緩やかな見守り的な支援があれば，虐待から家出，ホームレス化という最悪のパターンは防ぐことが出来たのではないか，という予測は容易に立つのである。

（５） 家族との別れによるホームレス化

岩田(2000)[12]は全てのホームレスに共通の経験(「共同経験」)として「仕事の喪失」「家族との別れ」を上げる。「家族との別れ」は既婚の人たちの離婚経験と，未婚の人たちの実家でのトラブルと家出の二つに種類を分けて考えることが出来る。後者には親との死別体験や義理の父母等との関係の悪化や虐待等があげられる。

Ａさんの場合も家族からの虐待ら避難し，別れて生き伸びようとすることが住居を失いホームレス化することの直接のきっかけになっている。

（６） 社会資源へのアクセス困難

高森は一般的に発達障害者の経験する社会資源へのアクセスへの障壁として,「経済的･時間的な障壁」「情報による障壁」「社会資源に対する否定的態度」「障害に対する(社会の)否定的態度」を挙げている[13]。

この障壁のうち少なくとも「情報による障壁」「社会資源に対する否定的態度」は知的・発達障害者のホームレスについてもある程度の妥当性を持っているのではないかと筆者は考える。知的障害者の場合には「情報による障壁」は情報を認識できない(知らない，得られない)，文章を読めない，情報を提供されても理解できないという問題である。

「社会資源に対する否定的感情」では「当事者の否定的感情」と「利用に際

しての否定的体験に対する怒り」が挙げられる[14]。前者は利用自体に当事者が否定的な感情を持っている場合であり，抱え込もうとする傾向，権利主張への抵抗，他人に助けを求めることへの抵抗等がある。森川(2013)は知的障害を持つホームレスの事例として，制限された情報から偏った社会資源への認識を作り，否定的な感情を抱くことで生活保護に結び付かない事例を提示している[15]。

Ａさんの場合はまずは発達障害があり，強い自閉的傾向を持つため，元来コミュニケーション自体が困難であり，会話で支援に必要な情報を伝達し，理解してもらうこと自体が難しい。また信頼関係形成が大変困難であるため「情報による障壁」が非常に高い。また母親から「他人の世話になるな」と擦り込まれて，それを障害特性上忠実に守っているため，生活保護を始め，その他支援を受けること自体に否定的感情がある。

３　まとめと今後の支援，および研究課題

以上，Ａさんの生活史を簡単に再構成し，文献照合して分析してみた。今後の支援課題としては障害福祉系の相談機関と接触し，そこを中心に見守りを継続して貰い，成年後見(補助)まで持っていければ，ということである。それも一定期間の時間が必要であると思われるが，機関による見守りだけでも冬季は凍死が懸念されるため，この秋には開始出来ないかと考えている。勿論信頼関係が得られ，成年後見を利用して運よく財産が守られても，家族との再統合は難しく，単身地域生活をするハードルは高いし，グループホーム等の利用も出来る保証はない。しかし，一つずつ可能性を探っていこうと考えている。

研究課題としては関係機関からの情報収集を進めながら，本人とも関わり続けて生活史をより精緻に描くことである。また並行して文献照合も進めて行きたいと思う。

注

（1） 某市独自の施策で，狭義の成年後見に限らず，地域生活する当事者と家族が不安を相談し，地域において安心した生活を送るための支援。

（2） 妻木進吾他(2010)「家族規範とホームレス」，『ホームレス・スタディーズ』，ミネルヴァ書房，p.169-201。

（3） 中野加奈子(2013)「ホームレス状態に陥った知的障害者のライフコース研究」，『佛教大学大学院　社会福祉学研究科篇』第42号，p.33-44。

（4） 高森明(2012)『漂流する発達障害の若者たち』，ぶどう社，p.91。

（5） 逵建志(2012)「発達障害を持つ成人男性への支援の一事例―路上生活支援施設における実践報告―」，『ソーシャルワーク研究』37(4)，p.62-68。

（6） 鈴木文治(2012b)，『ホームレス障害者―彼らを路上に追いやるもの―』，日本評論社，p.73-81。

（7） 荒木龍三(2011)『発達障害の僕がホームレスになった理由』，豊中市社会福祉協議会企画・監修，筒井書房。

（8） 森川すいめい(2013)『漂流老人ホームレス社会』，朝日新聞出版，p.128。

（9） 逵前掲，p.316。

(10) 逵前掲，p.315。

(11) 中野加奈子(2013)「ホームレス状態に陥った知的障害者のライフコース研究」，『佛教大学大学院　社会福祉学研究科篇』第42号，p.33-44。

(12) 岩田正美(2000)『ホームレス/現代社会/福祉国家』，明石書店。

(13) 高森前掲書，p.110-115。

(14) 高森前掲の類型を参考にしている。

(15) 森川(2013)前掲，p.118-120。